

子どもに寄り添う 教師として

春。学校は新学期を迎え、希望に燃えてスタートする——学校・教師はそうだったはずなのに、いま、全国の多くの学校、教室に深い迷いのなかで子どもたちを迎えようとする教師たちがいる。

新任途中で、理不尽なパワハラと意味の見えない日々の仕事に疲れ退職した東京の若者の無残。長い教師生活で初の「学級崩壊」を体験し3月を自己崩壊のギリギリ手前で迎えた北海道のベテラン教師。復職をためらう育休中の女性教師はわが子と教え子の育ちに不安をもつ。「ブラック」を強いる管理職もまた虚しさを抱えるという。

学校や教師をこんなにも痛めつけることの背後には、子どもたち、若者たちへの冷やかな施策が大手を振ってまかり通っている事情がある。いまや教師たちは、「スタンダード」と称する非教育に身体をなじませることではか学校・教室で子どもたちの前に立ち続けることはできないのか。

いや、絶対にそんなことはない。非教育の「嵐」が吹き荒れるなかでも、各地の教師たちは子どもたちに寄り添い誠実に実践をつくっている。そのなかに希望はある。だから希望を求める声の往還こそが必要なのだ。

冬の終わりに温かな風が草木を芽吹かせ、花ひらくきっかけを与えるように新たな出会いのこのときに、教師たちへの応援の声を贈りたい。戦後民主教育の出發を見続けた大先達、今春教師になる若者、パートナーを自認する保護者、教師教育の現場の大学人、震災復興の地を生きる教師など、多彩な声が織りなす誌面のなかで、春に教師の元気を、そう願う。